

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370338

研究課題名(和文) フランス・ロマン主義における「作者」像の成立と変容をめぐる総合的研究

研究課題名(英文) The status of "author" and its transformation in French romanticism

研究代表者

野崎 歓 (Nozaki, Kan)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：60218310

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：フランス・ロマン主義の時代における「作者」像をめぐって、とりわけ重要なケースであるバルザックとネルヴァルを中心に据え、メディアの拡大、広範な読者層の成立および「私」の同一性を探求する詩学の展開との関連で、作品の起源であるとともに作品によって遡及的に生み出されるものでもある作者のありようを照らし出すことができた。

具体的には、バルザックの創造的な力を形象化するヴォートランの物語に注目し『ゴリオ爺さん』『幻滅』『浮かれ女盛衰記』の三大長編の内容を一巻に凝縮した『バルザック』(集英社文庫)を刊行した。またネルヴァルに関する国際シンポジウムに参加し、流動的な「私」の記述が含む豊かな可能性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to throw light on the process of introduction and establishment of the status of "author" at the Romantic Era in France. Focusing attention on most significant cases of Balzac and Nerval, we examined how the author emerged, not only as originator of works but also as effect of his works. Our research led to the publication of an original anthology of Balzac's novels, *Le Pere Goriot* with excerpts from *Les Illusions perdues* and *Les splendeurs et les miseres des courtisanes* : a volume based on the idea of assembling three stories of Vautrin, mythic figure of *La Comedie humaine*, who personifies the exuberant creative energy of Balzac. On the other hand, we have attended several international symposia on 19th & 20th century French Literature, notably on Nerval. The paper in French we read on that occasion about the floating nature of the narrator of Nerval's work, reflection of a great flexibility of the author, will soon be published in the Proceedings.

研究分野：フランス文学

キーワード：作者 ロマン主義 小説 翻訳 バルザック ネルヴァル 作家主義

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、フランス・ロマン主義の時代における「作者」像の成立と変容をめぐって、メディアの拡大、広範な読者層の成立、および「私」の同一性を探求する詩学の展開との関連で、作品の「起源」であるとともに作品の「効果」として遡及的に生み出されるものでもある「作者」のありようを照らし出すことをめざしたものである。一方においては近代的職業作家のステイタスの確立者としてのオノレ・ド・バルザック、他方においてはジャーナリズムの領域をいわば浮遊しつつ「私」の深淵を探求したジェラルド・ネルヴァルを、この時期の「作者」像を考えるうえでとりわけ重要な存在として扱う。

(2) 研究の動機としてはこれまで、ロマン主義を自意識過剰のセンチメンタリズムとする通説があまりに浸透し、ロマン派作品に対する評価の低下を招くとともに、ロマン主義研究がやや活力を失っていたのではないかという認識があった。とりわけ深刻であるのは、フランス現代思想の潮流の中で「主体」あるいは「起源」の概念がラディカルな批判に晒され、解体された結果、強烈な「エゴ」の表現とみなされるロマン派作品を真摯な考察の対象とすることが憚られるような風潮すら生じてしまったことである。しかし現今もっともアクチュアルな課題とは、激しく揺れ動く社会状況のただなかにおいていかに個人が自らの位置を確保しつつ、共同体へと向けて声を発するかという問題ではないだろうか。それは根本的に「主体」の問題としてとらえられるべき事柄であり、西欧近代における自我の確立期とみなされるロマン主義時代の文学の問い直しが必須となる。

2. 研究の目的

(1) いわゆるポストモダンの思考が活況を呈した時期における停滞を経て、近年、フランスにおいてロマン主義研究は徐々に活況を呈し始め、成果を上げ始めている。また、

ポール・ベニシューの先駆的研究『作家の聖別』(1973年)の日仏における再評価の機運が高まったことはわれわれにとって大きな励ましと感じられた。ベニシューの著作は、19世紀フランスにおいて宗教的価値が揺らぐなか、詩人、作家が「聖別」を受け、聖職者の地位を徐々に奪っていった経緯を跡づけたものである。

(2) ベニシューの著作が浮き彫りにした近代的な作家像は、18世紀までの精神的権威の継承という観点に立つゆえに、やや「聖性」に特化しすぎている部分がある。われわれは具体例の検証を深めながらベニシュー的作家観念をさらに肉付けし、ある種の変幻自在な相貌と可塑性によって特徴づけられるロマン派的な「作者」像を明らかにすること、さらにはその現代にまで及ぶ射程を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) ロマン派文学がいかに社会と個人の緊迫した関係性のうえに成立したものであったかを明確にする。ロマン主義は同時代の現実と直截に向い合った点において、フランス文学史上、特筆すべき重要性をもつが、「作者」像はまさに社会との対峙において成立した。作品が「作者」に由来するのであり、作品が世に認められ流通することは必ずや「作者」の認知(さらには顕彰)を伴うという考え方が確立されたとき、作者は、作品の起源にして作品のもたらす「効果」としても成り立ったのではないか。その点を職業的作家のモデルケースというべきバルザックを例にとって作品にもとづき仔細に分析する。

(2) ロマン派的「作者」はまた、たえざる変容性を本質とするのではないか。新聞の文芸欄執筆家(フィユトニスト)の賃仕事に追われながら、ある絶対的なポエジーを夢見続けたネルヴァルはそうしたロマン派的な「作者」のあり方を体現している。分裂の危機を本質的に抱えながらも、同時に旧来の枠組み

から文学、芸術を解き放つ方向性を求めて、ロマン派における「作者」はさまざまなポジションからの発信を試み続けた。同一性を深く求めながらたえず外部へと開かれていくそのありさまを分析し、ロマン派文学のもっていた可能性の中心を照らし出す。

(3) そうした 19 世紀における「作者」像の確立と変容は、現代においても意義を失っていない。バルトの有名な論文「作者の死」(1968 年)にもかかわらず、作家たちはなお、個と共同体とのほさまにおける力動的な関係性を生きつつ、その関係性事態を糧として作品の創造に向かっているのではないだろうか。さらには翻訳の問題や映画における「作家主義」にも目を広げつつ、多様な実例をとおして 19 世紀的な「作者」像の射程を現代に探る。

4. 研究成果

に注目して、バルザック自身の創造的エネルギーの具現化としての意味を分析し、その成果にもとづき『ゴリオ爺さん』『幻滅』『浮かれ女盛衰記』の三大長編の内容を一巻に凝縮した編訳書『バルザック』(集英社文庫ヘリテージシリーズ)を刊行した。これまで他に例のない形での『人間喜劇』アンソロジーの試みであり、いわゆる人物再登場の手法のうち、「作者」と相互に反映しあうような形象が浮かび上がってくることを明確に示すことができた。

(2) 現在フランスで刊行中のネルヴァルの新しい全集を監修しているパリ第 8 大学教授ジャン=ニコラ・イルーズ氏と緊密に連絡をとりあい、2014 年にはイルーズ氏主催による国際シンポジウムに参加して研究発表を行った。ネルヴァルの旅行記における「私」が、きわめて匿名的かつ浮遊的な性質を帯びていることを指摘し、語り手/作者の自己同一性を一種の漂流状態におくことによって、逆に非西欧的な文明への回路が開かれていることを明らかにした。発表内容は近々刊行さ

れるシンポジウム論文集に掲載される予定である。また、2016 年にはイルーズ氏を日本に招き講演会を開催、ネルヴァルの人生と創造をめぐる「ロマン化」という新たな概念を得ることができた。これは自作のみならず、他者の過去の作品をも自らの生の一部とみなし、かつ創造の拠り所とするネルヴァルの特徴をとらえたものである。従来のテキスト研究が陥りがちだった、作者の生と作品の言葉とを完全に断絶したものとみなす姿勢の硬直を脱し、両者のあいだに有機的な連関を見る可能性をもつ概念である。そうした新たなネルヴァル学の息吹に刺激を受け、ネルヴァルおよびロマン派的な「作者」の機能を「夢の共有」をめざすものとして考察する試みを継続中であり、2016 年中に論考集として刊行する予定である(岩波書店)。

(3) フランス現代小説の翻訳を行うとともに、それぞれの作品において「私」がいかに「作者」像との相関関係のもとにテキストを織りなしているかを考察、ロマン派的作者の問題が現代において継承、展開されていることを明らかにした。さらに、「翻訳」の観点を導入することで作者概念のゆらぎをとらえるべく、かつて行った谷崎潤一郎に関する研究を文庫化し(中公文庫)、また新たに森鷗外の場合を分析、2014 年に日本文学学会に招かれて発表を行い、論文集に活字化された(和泉書院)。また映画における「作家主義」の代表的理論家であるアンドレ・バザンの作品を共訳し刊行するとともに(岩波文庫)、バザンの全体像を詳述しつつ作家論の現代的可能性を論じる単著を刊行した(春風社)。

(4) 以上は研究代表者による主な成果だが、研究分担者もそれぞれルソー、ランボー、ヴァレリー、リヒャルト・シュトラウスからル・クレジオに至るまで、ロマン主義から現代までの事例を考察し、「作者」がモダンな芸術概念において演じた役割を幅広く分析することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

- (1) 野崎 勲、大いなる遺産：ブルーストと現代フランス小説、言語文化、明治学院大学言語文化研究所、No.32、2015、pp.181 - 198
- (2) 塚本昌則、まどろみの詩学：ブルーストとヴァレリーにおける夢、言語文化言語文化、明治学院大学言語文化研究所、No.32、2015、pp.59 - 77
- (3) 野崎 勲、作者と訳者の境界で：ロラン・バルトから森鷗外へ、日本近代文学会関西支部編『作家／作者とは何か テクスト・教室・サブカルチャー』、和泉書院、2015、pp.113 - 128
- (4) Yoshikazu Nakaji, Rimbaud autocritique, Rimbaud poéticien, sous la direction d'Olivier Bivord, Classiques Garnier, 2015, pp.91 - 99
- (5) 佐藤淳二、真理とアルシーヴ：ルソーと自伝の問題構成、仏語仏文学研究、東京大学文学部仏文研究室、No.47、pp.81 - 104、2014
- (6) 野崎 勲、「作者の死」の彼方に：ミシェル・ウエルベックの挑戦、みすず、みすず書房、514、pp.4 - 5、2014
- (7) Yoshikazu Nakaji, La poétique de la charité et ses limites, Lire « Le Spleen de Paris » de Baudelaire, André Guyaux et Henri Scepi (dir.), Presses de l'Université Paris-Sorbonne, 2014, pp.113-124.
- (8) Yoshikazu Nakaji, La poésie d'une langue à l'autre : recherche, traduction, réinvention, Nichifutu Bunka, Maison franco-japonaise, No.84, 2015, p.221-227.
- (9) 塚本昌則、「夢の圧力」：ブルーストとヴァレリーにおける眠りと夢について、思想、岩波書店、No.1074、2013、pp.103-123

(10) 野崎 勲、欲望の不壊：ロマン主義からフロイトへ、思想、岩波書店、No.1068、2013、pp.125 - 142

(11) 塚本昌則、ヴァレリーとフロイト：奇妙なまなざしをめぐって、思想、岩波書店、No.1068、2013、pp.243 - 261

(12) Kan Nozaki, Truffaut in the Mirror of Japanese mirror, A Companion to François Truffaut, edited By Dudley Andrew and Anne Gillain, Wiley-Blackwell, 2013, pp.388-400

(13) Yoshikazu Nakaji, Une parole qui se veut performative : considérations génériques sur Une saison en enfer, Le Genre et ses qualificatifs, études réunies et présentées par Henri Scepi, La Licorne 105, Presses universitaires de Rennes, 2013, pp.227-236

(14) Masanori Tsukamoto, La conscience comme événement : une relecture de *L'Ange*, Forschungen zu Paul Valéry, No.24, 2013, pp.53-70

[学会発表](計4件)

塚本昌則、「声、夢、ブントウム ヴァレリーの「内的対話」を通して」、東京大学文学部仏文研究室主催「声と文学 インデックスとイリュージョン：それは誰の声か」、2014年9月27日、東京大学(東京都・文京区)

野崎 勲、「歌声と回想 ルソー、シャトーブリアン、ネルヴァル」、東京大学文学部仏文研究室主催「声と文学 インデックスとイリュージョン：それは誰の声か」、2014年9月27日、東京大学(東京都・文京区)

Kan Nozaki, « Au-delà de l'orientalisme : Nerval à la lumière de Said », Colloque international : Nerval : histoire et politique, Université Paris-Est, 2014年6月5日、アルシーヴ・ナシ

オナル(フランス)

Jean-Philippe Toussaint, Marianne Kaaz, John Lambert, Kan Nozaki, 《Un auteur et ses traducteurs》, Société des Gens de lettres, 2014年6月3日、フランス文芸家協会、オテル・ド・マッサ(フランス)

〔図書〕(計14件)

(1) 野崎 勲、春風社、アンドレ・バザン 映画を信じた男、2015、227p.

(2) 野崎 勲、中公文庫、谷崎潤一郎と異国の言語、2015、248p.

(3) 野崎 勲(大原宣久・谷本道昭と共訳)、岩波文庫、アンドレ・バザン『映画とは何か』(上)、2015、369p. (担当箇所: pp. 9 - 35; pp. 79 - 176)

(4) 野崎 勲(大原宣久・谷本道昭と共訳)、岩波文庫、アンドレ・バザン『映画とは何か』(下)、2015、284p. (担当箇所: 「訳者解説」 pp. 255 - 284)

(5) 野崎 勲(編)、集英社(集英社文庫ヘリテージシリーズ)『バルザック』、2015、787p. (「幻滅抄」(翻訳) pp. 411 - 477、「解説」 pp. 719 - 732)

(6) 中地 義和(翻訳)、作品社、ル・クレジオ著『嵐』、2015、259 p.

(7) マリアンヌ・シモン=及川(編)、水声社、『詩とイメージ マラルメ以降のテキストとイメージ』、2015、246p.

(8) 野崎 勲、河出書房新社、『翻訳教育』、2014、219p.

(9) 岡田 暁生、音楽之友社、『リヒャルト・シュトラウス』、2014、290p.

(10) 野崎 勲、講談社、『フランス文学と愛』、2013、268p.

(11) 野崎 勲(編)、東京大学出版会、『文学と映画のあいだ』、2013、228p.

(12) 野崎 勲(翻訳)、講談社、ジャン=フィリップ・トゥーサン著『マリーについての本当の話』、2013年、175p、11月

(13) 野崎 勲(翻訳)、筑摩書房、ミシェル・

ウエルベック著『地図と領土』、2013、402p.

(14) 中地 義和(翻訳)、筑摩書房、ル・クレジオ著『隔離の島』、2013、487p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野崎 勲 (NOZAKI KAN)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号: 60218310

(2) 研究分担者

佐藤 淳二 (SATO JUNJI)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号: 30282544

中地 義和 (NAKAJI YOSHIKAZU)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号: 50188942

岡田 暁生 (OKADA AKEO)

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号: 70243136

MARIANNE SIMON-Oikawa

東京大学・人文社会系研究科・准教授

研究者番号: 70447457

塚本昌則 (TSUKAMOTO MASANORI)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号: 90242081